大分合同新聞社

オオイタ デジタルブック OITA DIGITAL BOOK

豊後の武将と合戦

渡辺 克己 著

【第八章】南北朝動乱 高崎山の攻防 2

Next

初版発行：2008 年 7 月 25 日

目次

【写真】十文字原から見る高崎山
第八章●南北朝動乱 高崎山の攻防 2
⑦ 高崎山城落ちず
⑧ 南朝軍、府内を占領
⑨ 危機を救った阿蘇軍
⑩ 4度目の包囲戦
⑪ 九州北朝軍ばん回
※奥付け／デジタルブックについて

（題字と挿絵は二紀会委員・菅 久）

●原著案内

本デジタルブックは、以下の書籍「豊後の武将と合戦」をデジタル化したものです。

「豊後の武将と合戦」

著者：渡辺　克己
A5 版 314 ページ
発行：大分合同新聞社
発行日：2000 年 2 月 15 日
定価：2300 円（税込み）

購入問合：その他の大分合同新聞社の本については、大分合同新聞文化センターへ
電 097-538-9662「合同新聞の本」Web ページ

十文字原から見る高崎山

⑦高崎山城落ちず

― 南朝軍また無念の撤退 ―

南朝軍の三度目の豊後侵攻を迎えた大友氏時は、高崎山城に立てこもり、敵襲を寄せつけなかった。しかし守りに徹し、城塞を出て戦いを仕掛けることはしなかった。

南朝軍に決戦を挑むほどの、対等の兵力を持っているわけではないし、そのような危険を冒すつもりもない。

九州の現状は、懐良親王、菊池武光を中心とする南朝軍が、圧倒的な勢力を維持している。これに対して足利の幕府が、九州の北朝軍ばん回に、強力なてこ入れを、遠からず必ずするだろう。それまで〝九州北朝軍の拠点はここにあり〟と、抵抗の旗を高崎山上に高くかかげておけばいい、と氏時らは、待ちの姿勢なのだ。

南朝軍の高崎山城攻めは、いっこうに成果があがらず、日数を重ねるばかりであった。高崎山城は、それほど攻め難い堅固さであったのだ。

戦いが長引けば、兵站線の長さが悩みとなる。食料などの現地調達にも限度がある。肥後の基地からの連絡は、志賀氏房らのゲリラ戦法によって断ち切られている。兵たちの不安はつのり、戦意もにぶってきた。

攻撃をかけてから一カ月目。

軍議はついに撤退を決めた。

「負けて逃げるのではないぞ。出直すのだ。必ずや目にもの見せてやる。それまでのおあずけぞ」

懐良親王は、夏の日射しに緑のかがやきを増した高崎山を見上げ、口惜しい胸のうちを吐き出さずにはおれなかった。

親王をうながして後退を開始した菊池武光の無念さは、もっと大きかったにちがいない。またも大友に背を見せて退くのだ。

「再びここに来て決戦を挑んでみせる」

と、幾度も自分に言い聞かせた。

南朝軍が退却を始めたと知ると、鳥屋城の志賀氏房は、今度は先まわりをして退路に待ち伏せ、行軍に疲れた軍列を襲撃して苦しめた。

戦記には「九重山で激戦」とある。豊後国志などによると、九重山は現在の久住山を主峰とする山群を指しているから、このときの九重山も、その山群の中のいずれかの山を指したものだろう。前回の高崎山城攻めのさいの退路の「八丁辻」が現在の「八丁原」とすると、九重山群の泉水山、黒岩山、猟師山などの西麓の谷道を抜けて肥後へ入ったのだから、今回もこの道をたどったのだろう。九重山群の谷道を行く南朝軍の長い列を断ち切るように、やぶや岩かげに伏せてゲリラ戦を展開する志賀勢と、幾度も激しい衝突があったのだ。

強力な南朝軍の侵攻を、二度とも撃退した豊後大友の奮戦ぶりは、京都の幕府にも聞こえた。

幕府の出先機関である博多の九州探題は、南朝軍に占拠されたままであり、北朝側に味方するはずの各地の武将は、南朝側

の優勢に対して、なりを潜めているありさまだ。その中にあって豊後の大友が、高崎山城で南朝軍の猛攻に屈しない健在ぶりをみせていることは、九州北朝軍ばん回への希望の灯であった。

「強い支援を。有力な探題の派遣を」と、豊後から矢の催促を受け、足利尊氏も幾度も探題派遣をこころみたが、皆うまくいかないままで、気にしながら他界してしまった。あとを継いだ義詮も、何とかしなければと、気ばかりあせって実現できないでいる。

そのような中で、この度の大友方の二度にわたる戦勝である。義詮としても、これ以上九州に対して無策ではいられない思いであった。がさて、適任者の人選となると容易でない。優勢な南朝軍と激突しなければならないし、戦勝の見通しも立たない。そんな九州で苦労しようという勇将は容易にみつからなかった。

義詮が、ようやく管領斯波高経（しばたかつね）の子氏経を九州探題職に起用し出向を命じたのは正平十六年（北朝・康安元年―一三六一）六月であった。

⑧南朝軍、府内を占領

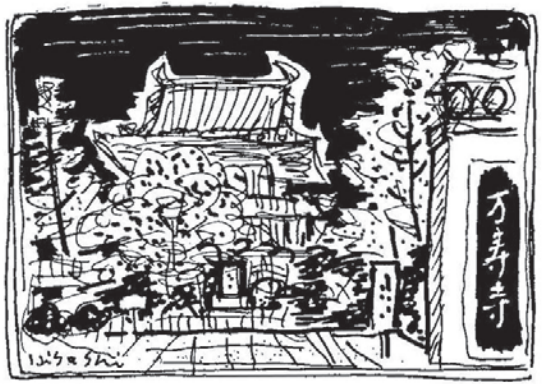
―万寿寺を本陣に猛攻―

斯波氏経は強力な軍勢を率い、作戦を練って九州に上陸したわけではない。六月に京都を出発したのだが、海路豊後の高崎山城に入ったのは十月であった。京都から豊後まで四カ月もかけている。しぶしぶやって来たと言わざるを得ない。

南北朝動乱を記述した『太平記』には、斯波氏経は九州下向

のとき、遊女を引き連れて行った、そういう心掛けでは何ができるものか、と凡庸ぶりを笑っている。

氏経が北九州に上陸せず、高崎山城に入ったのは、九州の中では、ここが一番安全と見たからだ。彼は高崎山城を仮の九州探題の館とし、九州各地の北朝側武将に、指示・命令を出している。



大友氏時としては、九州北朝軍の戦力を高揚する、頼りがいのある探題職の九州上陸を期待していたのに、遊女まで連れて来て、城内に居座られたのでは、将兵の士気にも影響する、とにがにがしい思いであった。それは、つい態度にも現れるとみえ、北朝側に傾いている肥後の阿蘇大宮司・阿蘇惟村（これむら）に氏経が送った書状に、「大友は動いてくれない。頼りになるのは惟村殿だけだ」

という意味の愚痴を述べて、協力を依頼している。しかし一度だけ、大友氏時と協力して戦果をあげている。高崎山城に氏経が入って十カ月後の正平十七年（一三六二）八月、高崎山城を出て、豊前まで遠征した。

ここには菊池氏の一族菊池武盛が守護代として南朝側から派遣されていた。斯波・大友の豊前侵攻は、これを討って豊前の郷士たちを味方に引き入れることと、九州探題の存在を示した

かったのだ。兵力の乏しかった菊池武盛は討ち取られ、将兵五十余人が戦死した。豊前衆の大半は北朝側につき、豊前遠征は一応成功であったようだ。

武盛を殺された菊池武光の怒りは大きかった。思えば、高崎山城攻めの失敗から早や三年になる。必ず出直して攻め落としてみせる、と心に誓って撤退したのだ。しかし長途の遠征で消耗した戦力の回復や、好機をうかがうのに思わぬ歳月を費やしてしまった。

「豊後の大友に、豊前まで我がもの顔に荒らされたとあっては、もはや差し置いてはおけぬ。武盛の仇も討たねばならぬ。出陣の用意を…」

懐良親王、菊池武光の南朝軍が、三度目の高崎山城攻めに来襲したのは、この年九月三日である。

今度は、府内も占領し、万寿寺を本陣として猛攻を開始した。

大友の城下町である府内を、南朝軍の手中にすっかり収め、高崎山城を孤立状態にして攻め立てる戦法だ。城が陥落するまでは退かぬという激しさが城中にも伝わるほどであった。

大友勢としては、城の守りは固いと自負してはいるものの、府内をさんざんに荒らされ、高崎山城は完全包囲されて長期戦に持ちこまれると、どこからほころびが出るかわからない。包囲軍の後方攪乱（かくらん）に期待されていた志賀氏房の軍は、南朝軍が警戒を厳にして、鳥屋城からの要路も押さえられているありさまである。

危ないと感じた大友氏時は、肥後の阿蘇大宮司・阿蘇惟村に密使を走らせた。阿蘇惟村は肥後の名門で、宮司ではあるが兵

力を蓄えている。肥後で、菊池氏に対抗できる勢力は阿蘇氏だけだった。

阿蘇氏は、南北両朝に分裂した当初、どちらかというと南朝色が濃く、懐良親王が幼にして征西大将軍として九州に入ったとき、阿蘇氏に頼ろうとしたことがあった。しかし当時、阿蘇氏の兄弟間に争いごとがあってもめていたため避けたといういきさつがある。

その後、菊池氏に懐良親王が迎えられ、九州南朝軍の中心勢力として、菊池氏が頭角を現すに至って、阿蘇氏の影が薄れてきた。また肥後国内では対立する勢力だから、菊池氏との仲は決して円滑ではない。したがって阿蘇氏はしだいに北朝側に傾く態度をみせていたのだった。

⑨危機を救った阿蘇軍

― 南朝軍の背後を襲う ―

大友氏時が密使に持たせた、阿蘇大宮司・阿蘇惟村への書状には「あなたが北朝側に味方し、高崎山城を包囲している南朝軍の背後を襲って下さるなら、現在私が所持している肥後国の守護職・所領や日田荘などを、あなたに譲り渡すことを約束します。ご決断をいただきたい」という内容がしたためてあった。

氏時は、足利幕府に忠実、かつめざましい活躍によって、将軍義詮に信頼され、所領の増額や所職を新たに与えられていた。肥後の守護職を三年前（北朝・延文四年 ― 一三五九）に与えられたのもその一つであった。

その肥後守護職などを、阿蘇惟村に譲る約束をするについて

は、すでに「阿蘇氏を味方に付けるため譲渡したい」と幕府に申し出て、義詮の内諾を得ていた。

阿蘇惟村は、氏時の要請に応じた。

強力な援軍を率いた惟村は、長駆豊後に侵入し、高崎山城を囲む南朝軍の背後に迫った。

菊池武光らは仰天した。まさか肥後の阿蘇氏が、大友を助けるために軍事行動を起こそうとは―。今度こそは、断じて高崎山城が落ちるまでは囲みをとかぬと、城下町府内をも占拠し、勝利への自信さえのぞかせていたのに、思いがけぬ事態となった。

緊急軍議の結果、またまた無念の撤退を決めた。阿蘇勢との衝突を避けて、退却に移ったのは十一月。万寿寺を本拠にして高崎山城攻撃を始めてから二カ月余、霜月の冷たい風の中を退却していった。

菊池武光は、このまますごすごと肥後へ引き揚げたのでは、腹の虫がおさまらない。そこで引き揚げる軍を反転させて、志賀氏房の拠る、大野荘の鳥屋城を包囲させた。二度目の包囲戦だ。

前回の包囲攻撃は、中途で打ち切って、高崎山城へ転じた。無念の思い出がある。南朝軍としては、素通りできない城であった。

「せめて、氏房めに目にもの見せてやらねば、肥後へおめおめ帰れぬわ。一同、ここで手柄を立てよ」

武光は部下を督励し、本陣を城久保（じょうんくぼ）というところへ置いて城をにらみすえた。

天然の要害は強い。腰をすえて一カ月あまり攻めたが戦果があがらない。そこで最後の手段として火攻めを考えた。

雪はまだ積もらず、冬枯れの山すそは、火を得るとたちまち火勢をつのらせて、山頂へ燃え広がる。火に巻かれれば、城兵は逃げ出して来る。そこを討ち取ろう、というわけだ。作戦どおり火は音を立てて、どっと頂上へ向かって燃え上がった。

炎と煙に巻かれ、城外へ追い出された志賀勢は、待ちかまえた南朝軍と必死の戦いを展開した。記録によれば、志賀勢は、近地宗房という武将が戦死、他に討ち死に二人、負傷十四人。南朝軍も、鬼塚左衛門次郎という武将の討ち死にのほか負傷者が幾人も出た。

将兵の損害からみると、小規模な戦闘で、いわば相撃ちのかたちで終わっているが、山城を焼き払った分だけ南朝軍の勝ちといえそうだ。こうして冬の久住を越えて、南朝軍は肥後へ帰っていった。

懐良親王、菊池武光の率いる南朝軍は三度目の高崎山城攻めにも失敗した。しかし相変わらず意気盛んで、九州の大半を押さえ、豊後の大友は孤立状態にあった。

九州北朝軍の立て直しに来たはずの、斯波氏経は、高崎山城にこもったまま、ほとんどなすこともなく日を重ねた。幕府も業をにやしたとみえ、正平十九年（北朝・貞治三年―

一三六四年）、氏経の探題職を解任し、京都に呼び戻した。氏経が高崎山城に入って三年目であった。

幕府は、氏経の後任に渋川義行を派遣したが、この男も凡将であったらしく、九州の地を踏むことなく帰京している。

こんな状態のまま、幕府は将軍義詮が病没し、義満があとを継いだのが正平二十二年（北朝・貞治六年）であった。

その翌年には大友氏時が病没した。

⑩ 4度目の包囲戦

―今川氏の豊後入りで―

大友氏時の跡継ぎには、長男の氏継がいた。氏継は、氏時が死ぬ三年前に元服し、このとき大友本家の家督を継いでいる。ところが、どうしたわけか氏時の死後、大友本家は氏継の弟の親世が入って采配を振るっているのだ。しかも氏継は南朝側に転向している形跡がある。

なぜこうなったのか。先行き不透明な激動時代の渦中にある地方の支配者が、生き残るための工作をしたのだという見方がある。

『豊後大友物語』を著した狭間久氏は、氏継は偽装の転向ではなかったかとナゾ解きをしている。それは、北朝、南朝どちらが天下を制しても、大友家が生き残るには、両方に分かれていればいいわけで、氏継・親世兄弟の間に密約があったのだ、というのである。

その証拠には、後に親世の後継者に、氏継の子の親著を立てている。〝もしも南朝側が勝てば氏継が大友家を握って、氏継

の後継者に親世の子を立てる。北朝側が勝てばその逆〟という約束のもとに、氏継は南朝側に走ったのではないかというのである。

大友親世が城主となった高崎山城は、九州北朝側の唯一の拠点として相変わらず孤塁を守り、北朝側のばん回を待ち望んでいた。しかし斯波氏経が去った後、またも九州探題は空席のままであり、幕府から頼もしい支援のさたがない。

その幕府は、将軍を継いだ義満がまだ十歳の子供で、細川頼之の執政下にあり、内政に手いっぱいで、九州のことまで考えるゆとりがなかった。

これに対して豊後では、大友の支族であり、大友本家の後見役を自任し、幕府の信頼も厚い国東の田原氏が、剛直な直貞から孫の氏能の代となり、めきめきと実力を伸ばしていた。氏能は、九州北朝側の衰退で、豊後大友家が孤立状態にあるのが心配でならない。そこで本家に代わって直接京に上り、九州の実状を訴え、救援を要請するなど行動を起こした。国東からは、氏能のほかにも、富来忠茂、都甲三郎四郎、木付頼直らも京に上って陳情している。

国東地方の武将は、足利尊氏の時代から、大友本家と共に尊氏に従って行動を共にし

ている、根っからの北朝側だから、九州の現状が心配でならないのだ。

幕府がようやく強力な武将を得て腰をあげたのが建徳元年（北朝・応安三年一一三七〇年）六月であった。実力派である今川貞世（了俊）を九州探題に起用したのである。

了俊は探題職を引き受けたあと、田原氏能あてに「九州へ下る節はよろしく頼む」という、応援依頼の書状を送っている。本腰を入れてやる気がうかがえる。

了俊は、周到な作戦を練った。まず豊後と北九州の二方に上陸して、南朝軍を分散させ、北九州では、沈黙している郷士の武力を味方に結集して南朝軍に当たる戦略だ。

作戦を開始したのは翌年の二月。了俊は京都を出発した。そして、まず息子の義範を先発させ、豊後の高崎山城へ向かわせた。

今川義範の豊後入りを護衛したのは、国東半島の〝浦辺衆〟、すなわち水軍であった。これを指揮したのは田原氏能、都甲三郎四郎、木付頼直らであった。

備後国から海路を豊後へ直行し、七月二日の夜、高崎山城へ入った。

今川氏が九州探題として豊後に上陸したことは、南朝側にすぐわかった。

菊池武光は、今度こそ高崎山城を落とさねば退かぬと四度目の軍を起こした。正平十三年（一三五八）の第一回高崎山城攻めから二度、三度と攻め、早や十三年の歳月を経ている。

まず先発に息子の菊池武政を将として豊後になだれ込ませた

のが七月二十六日。続いて武光の大部隊が、伊倉宮良成親王を奉じて、府内に攻め入り、またも万寿寺を本拠として、高崎山城包囲戦を展開した。

⑪九州北朝軍ばん回

―60年の長い動乱に幕―

四度目の高崎山城攻めを指揮した良成親王は後村上天皇の皇子で、懐良親王の甥（おい）に当たる。懐良親王は自分の後継者にと、吉野から呼び寄せ、九州南朝軍の指揮をとらせることにしたのだ。この合戦が良成親王にとっては、九州における本格的な戦闘の初体験であった。

一方、今川了俊は、弟の頼泰（仲秋）を肥前の松浦へ上陸させた。ここで松浦党に代表される肥前国の中小土豪を味方に引き入れて結集。九州南朝軍の本拠ともいえる大宰府へ向けて進撃を開始した。

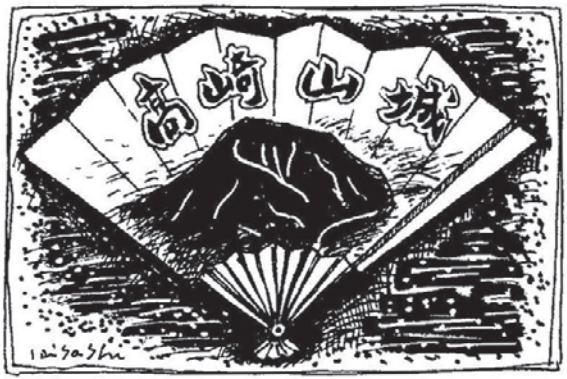
了俊自身は、この年十二月中旬に豊前に上陸し門司に陣を敷いた。了俊は手勢三百騎の小部隊であったが、途中で、長門、周防の守護大名大内義弘の応援を取り付け、門司に陣を敷いたときには四千騎の大勢力になっていた。

良成親王を奉じた菊池武光の高崎山城攻撃は、またも難渋を極めた。まさに執念ともいえる、南朝軍四度目の高崎山城包囲戦に、武光はあらん限りの手を尽くして攻め立てた。しかし高崎山城は、文字どおり難攻不落であった。

山城にこもる軍の泣きどころは、食料と水である。高崎山城は、もちろん十分な用意はしていただろうが、包囲が長引けば

外からの補給が必要である。高崎山の北側は海に急坂をなしてなだれ込んでいるから、この方面は包囲陣は手抜かりになりがちで、ろう城軍にとっては大切な食料の搬入路となる。水は東側山腹に豊かなわき水があるから、ここを守りさえすれば不自由はしない。海上からも運ばれる。

今川義範を案内して高崎山城に入り、大友親世の指揮するろう城軍に加わった田原氏能の軍忠状によると、菊池武光の主力軍が包囲攻撃を開始した八月六日から翌年正月三日に包囲を解くまでの百五十余日の間に、百度を越す合戦があったと記されている。だが、城は動じなかった。



このように、菊池の主力軍が高崎山城に膠着（こうちゃく）している間に、豊前に上陸した今川了俊の軍と、肥前に上陸した今川頼泰の軍は、二方から大宰府へ進撃して行った。

大宰府には、九州南朝軍の中心である懐良親王と菊池軍がいたが、主力は高崎山城攻めに割いているので、守りは手薄であった。

危険を感じた親王は、高崎山城を攻めている菊池武光に、救援を求める急使を送った。

「大宰府危うし」と聞けば捨ててはおけない。高崎山城の囲

みを解いてでも駆けつけねばならない。

「またも高崎山に背を見せて去らねばならぬか――。運の強い大友めよ」

武光は、冬空にくっきりと稜線を見せている高崎山を、歯ぎしりする思いで見上げながら、全軍の転戦を命じた。文中元年（北朝・応安五年一三七二年）正月三日である。

豊後から転進した菊池軍の主力は急行軍で大宰府に到着し、今川了俊らの攻撃に対して陣を張った。しかし了俊のねばり強い戦略には勝てず、この年の八月に大宰府は落ちた。このため懐良親王は、高良山（現・久留米市）に退いて、ここを九州南朝軍の根拠地とした。

大宰府を取り戻し、九州探題の本拠を構えた了俊は、九州諸国の南朝側武士に、いろいろな好条件を示して誘降策を活発に展開すると共に、軍事活動をすすめて、北朝側勢力の拡大に努めた。

南朝側の中心勢力であった肥後の菊池氏は、大宰府撤退の翌年に武光が病死し、あとを継いだ長男の武政も、その翌年死没するという悲運に見舞われた。それを機会に懐良親王と菊池軍は、高良山を捨てて肥後へ退いた。

その後、懐良親王は、征西大将軍職を良成親王に譲って引退した。こうして九州南朝軍の勢力は、急速に衰えていった。

南朝と北朝が和解し、一つとなったのは元中九年（北朝・明徳三年――一三九二年）である。約六十年にわたる長い動乱に、九州北朝軍のかなめの役を遂げたのが豊後の高崎山城であった。

オオイタデジタルブック

オオイタデジタルブックは、大分合同新聞社と学校法人別府大学が、大分の文化振興の一助となることを願って立ち上げたインターネット活用プロジェクト「NAN-NAN（なんなん）」の一環です。

NAN-NAN では、大分の文化と歴史を伝承していくうえで重要な、さまざまな文書や資料をデジタル化して公開します。そして、読者からの指摘・追加情報を受けながら逐次、改訂して充実発展を図っていきたいと願っています。情報があれば、ぜひ NAN-NAN 事務局にお寄せください。

NAN-NAN では、この「ロマンを追って」以外にもデジタルブック等をホームページで公開しています。インターネットに接続のうえ下のボタンをクリックすると、ホームページが立ち上がります。まずは、クリック！！！

大分合同新聞社　NAN-NAN　別府大学

◇著者略歴◇**渡辺克己**

大分県佐賀関町木佐上出身。大正二年生まれ。朝鮮京城で新聞記者。終戦で引き揚げ、大分合同新聞記者。こども新聞、学芸部等の部長を経て調査部長を最後に昭和四十三年定年退社。昭和二十七年から同四十三年まで大分市社会教育委員、昭和四十三年から同四十八年まで民生児童委員。

郷土史を研究し「大分今昔」「豊後の磨崖仏散歩」「国東古寺巡礼」「忠直卿狂乱始末」「真説・山弥長者」等の著書。

デジタル版「豊後の武将と合戦」　第八章●南北朝動乱 高崎山の攻防 2

2008 年 7 月 25 日初版発行
著者　渡辺　克己
原著　2000 年 2 月 15 日発行／発行：大分合同新聞社
／制作：大分合同新聞社文化センター／印刷：小野高速印刷

《デジタル版》
編集　大分合同新聞社
制作　別府大学メディア教育・研究センター 地域連携部
発行　NAN-NAN 事務局
（〒 870-8605 大分市府内町 3-9-15 大分合同新聞社　総合企画部内）

© 大分合同新聞社、渡辺克己、菅久